

東京大会が、内外 16 人の参加を得て日仏会館ホールで開かれた。選ばれた大会テーマは「文化の三角測量」である。筆者は初日朝、報告者のひとりとして「言語の三角測量」と題し中江兆民によるルソー『社会契約論』の漢文訳について報告したが、その日は渋沢・クローデル賞の選考会と重なりシンポジウムはごく一部しか聴講できなかった。その前夜に行われた、大会の基調講演にあたる川田順三氏とフランソワ・ラブランチャーヌ氏の対論「文化の三角測量、クロード・レヴィ=ストロース、日本」について報告するにとどめる。

文化人類学はイギリス、フランスをはじめ海外に植民地をもち、いち早く「近代化」を遂げた西洋の「文明国」で発達した学問である。文明の中心が周辺の未開文化を研究する西洋中心的人類学に異を唱え、「非ヘゲモニー的人類学」を掲げる国際人類学者フォーラム Forum international des anthropologues (FIA) の大会が、日仏シンポジウムの枠で、神奈川大学常民文化研究所との共催により会館で開かれたのである。

「文化の三角測量 triangulation des cultures」は、日本の民俗学研究から出発し、フランスで人類学とアフリカ研究を学び、フランス諸地方の伝統的職人と、西アフリカはブルキナファソの旧モシ王国について、長年現地研究をした川田順造氏が唱える文化研究の方法である。対比的な二文化の比較に、まったく異なる第三の文化を加えることにより、研究者自身の視点を相対化し、それぞれの文化の隠れた性質を立体的に浮き彫りにすることを目指す。他方、哲学から人類学に転じたラブランチャーヌ氏は、レヴィ=ストロースの「構造」人類学に対し、人類学に「主体」概念を復活させ、エスノ精神分析学を起点に「感覚的なものの人類学」を開拓してきた。主たるフィールドはブラジルだが、最近では日本と中国に滞在した経験をもとに「文化の四角測量」の可能性を示唆している。

筆者の司会のもとに行われた対論では、川田氏が翻訳しラブランチャーヌ氏が書評を書いているレヴィ=ストロースの死後出版 *L'autre face de la lune. Écrits sur le Japon*, Seuil, 2011 (『月の向こう側 日本について』中央公論新社、近刊) を媒介項に、両者の「文化の三角測量」観を突き合わせ、内と外から日本についての視点を交叉させる興味深い対論になった。

(三浦信孝 記)



川田氏



ラブランチャーヌ氏

## 日仏シンポジウム

### 対論

### 「文化の三角測量、クロード・レヴィ=ストロース、日本」

東京外国語大学名誉教授・神奈川大学特別招聘教授

川田順造

リヨン第二リュミエール大学名誉教授

フランソワ・ラブランチャーヌ

司会：三浦信孝 (中央大学教授)

2013年5月16日(木)

### FIA (国際人類学フォーラム) 「非覇権的人類学を求めて『文化の三角測量』」

主催：日仏会館、神奈川大学日本常民文化研究所

2013年5月17日(金)、18日(土)

5月17日18日の2日間、国際人類学者フォーラム(FIA)の